

雜品集

now-loading

道って

「道って、よく人生に例えられたりするじゃん？」

「うん」

「お前は、まっすぐな道と、曲がりくねった道のどっちの人生がいい？」

「うーん……。まっすぐな道かな」

「えー。なんでだよ」

「だってラクしたいじゃん。一度きりの人生なんだから敢えて苦しむ道なんて選びたくないよ。君は？」

「俺は当然曲がりくねった道を選ぶ」

「なんで？」

「だって先が見えてる道なんて退屈そうだから。一度きりの人生だからこそ、いろんな景色が見たいんだよ。例えそれが、恐怖で足が震えるものでも構わないね。そうさ、落とし穴があってもいい。地雷がそこらじゅうに埋められていたとしてもいいだろう。要するに、刺激がほしいんだよ。人生を濃いものにする刺激が」

「馬鹿みたい」

「馬鹿じゃねえよ。障害が多いほど燃えるじゃねえか」

「君は早死にするタイプだね」

「まあ、そうかもな。でも、見えてるゴールに向かって行くより、見えないゴールに向かって行く方が、なんか、楽しそうじゃないか？ 長生きしたってつまらない人生送ってたんじゃ、その『一度きりの人生』がもったいないと、俺は思うけどな。人生を難易度でいうなら、お前はイージーモードで、俺はハードモードだ」

「なるほど。確かにそうだね。先が見えてこない人生も趣深い何かがあることは分かったよ」

「だろ？ だからお前も——」

「それなら僕はノーマルモード目指して頑張ることにするよ」

「...お前は長生きするよ」

少年は枯れていた。

飢えていた。

おそらくその少年が可愛らしく魅力的な一輪の花のような女性であったのなら、誰かが救いの手を差し伸べてくれたのかもしれないが、あいにく、彼は赤の他人を無条件に惹きつけられるようなモノなど、何一つも持ち合わせていないただの男の子なのだからそれは端から期待などしてはいなかった。だからと言って他の何かにする方法など考える脳も能もないので、ただただ細かくサラサラとした黄土色の砂の上でべっとり枯れたようにじっくりと神からの啓示を待っていたのである。

ここはアラビア半島の砂漠の中にある遺跡の一つ。大小様々な大きさの岩が丁寧に積み上げられ大きな壁となり、その集合体が遺跡として少年の目の前に存在している。

彼は、遺跡というものに全く興味を持ってはいなかった。というより、遺跡を今、生まれて初めて目にしたのである。しかし、彼はまだこの建物を遺跡として認識しておらず、ただの岩の塊だと思い込んでいる。そのため、彼自身まだ遺跡は見たことがない存在として脳内に刻み込まれているのだろう。

「み...み、ず」

少年は遺跡を見に来ていた人に、飢えている自分をアピールし、三日ぶりのご飯にありつこうと声を出した。しかし、久しぶりの発声で、しかも水分すらあまり摂っていなかったせいで喉が乾燥し、張り付いていた。そのため、その声帯から発せられた声は、初代ドラえもんを遥かに上回るダミ声。

声をかけられた人は怪訝そうな顔をして早歩きで去って行ってしまった。

「まっ、まっ、て」

逃げて行く人を引きとめようと、依然としてガラガラ声が続いている彼が大声で叫ぶ。しかし、その一声で周りにいた人は皆、彼の事を不審人物として脳内のブラックリストにすばやく書きこみ、眉間にシワを寄せながら彼の行動を注意深く観察し、一歩ずつそろそろと遠ざかって行った。

少年は背負っていた登山用の大きなリュックサックを開くと、そこから家を出るまでは重かつたはずの水筒を取り出した。蓋を何回か回して開けると、彼はまぶしい太陽光を我慢しながら上を向く。そして、口を大きく開けてその上に水筒を逆さなるよう持ち、開いているもう片方の手で底をポンポンと叩いた。

ポタッ。

一滴の水滴が彼の喉に落ち、まるで使い古されたスポンジの上に落ちるようにジュワっと染み込んでいくのが分かった。たかが一滴の水と言えど、彼の張り付いた喉を剥がすのには十分であった。

「あ、あ、あー、あー」

少年は自分の声を確認するため、慎重に声帯を震わせた。よし、ちゃんと出てる。

しかし声が出せるようになったからと言って周りにはもう誰一人として彼に近づこうとする人

の姿は見え、歩きまわり、人を探すのも面倒な彼は、仕方なくその場に腰をおろした。

そしてすぐに立ち上がった。

彼が目の前を見るとライオンが一頭、体は遺跡に隠し、顔だけはしっかりとこちらを睨みつけていた。

彼はぎこちない素振りでものを振り返る。予想通り誰もいない。つまり標的は自分一人しかいないのだ。

ピシッと身じろぎ一つしない彼とは裏腹に心臓と汗腺だけは大暴れ。こんなのは高校の頃に行った六キロの持久走を走り終えた時以来の出来事である。しかし、一つだけ違う所があるのだとすれば、そこに爽快感があるかどうかだ。これが恐怖心に置き換えられた時、人は神に召される覚悟をしなければならない。しかもその相手が百獣の王と称される獰猛な肉食動物であるのなら尚更だ。

しかし彼は違った。

一瞬だけ怖気づいたものの、彼とて空腹で飢え死に寸前の身。どうせこのままのたれ死ぬならば一世一代の大勝負に打って出ようと考えたのだ。なんで砂漠にライオンがいるのかなんてそんな事はもう、どうでもよかった。どうせプロット上のミスか何かであろう。

彼は生身で向かっていった。武器なんてものは必要ない。この体一つで十分だ。弱肉強食の世界を思い知るがいい。

「ふはははははは」

バンッ！

バタッ。

「え？」

彼が走り出したと同時にライオンは何者かに腹部を撃ち抜かれ倒れてしまった。そしてその後すぐ、聞いたことのない言葉をやたら早口で喋り出す若い男が近くに寄って来た。その男は「サーカスの練習をしていたらライオンが逃げ出したんだ。慌てて追いかけて来たけど怪我は無かった？」と聞いていたのだがそんなものは彼に通じているはずがなかった。それどころか彼は必死にお腹をさすり、空腹であることをアピールし始めたのだ。

運良く彼のジェスチャーは男に伝わったようだ。

男は持っていたカバンから薄く切られたパンを二枚取り出すと少年に渡した。フランスパンのように固く歯ごたえのありそうなパンであった。

少年は嬉しそうな目で何度も男とパンを交互に見ると一口、かぶりついた。

噛み切れない。

そのパンはすごく固かった。それは長い間エネルギーを補給していなかった少年にはもはやパンを噛み切る力さえも残っていなかったのか、それとも、パンがそのまま封のされない状態でカバンの中に放置され、異常なまでに固く乾燥していたことが原因なのか分からない。しかし、まさか、いままで柔らかいという印象が強かったパンが噛み切れないという事態に陥ろうとは考えもしなかった。

だがしかし、それでもこれが貴重な食料であることに変わりはない。

少年は、どうにかしてこれを胃の中に収めるべく、僅かな体力を削りパンを噛み、引き千切ると、口の中でモチモチと咀嚼を始めた。口の中に薫るほのかな香ばしい香りは確かにパンの匂いそのものであったが、口の中にあるギシギシと歯を押し返してくる食感間違いなくゴムであった。

目の前の男が「美味しくない？」と、困った顔で言っているのを少年はなんとか理解すると笑って親指をつきたてて見せた。時にはつかないといけない嘘もあるのだと少年はそのとき始めて経験を通じて悟ったのであった。

男が嬉しそうに笑って去って行くのを見届けた後も少年はパンとの闘いを続けた。

そして、せめて水も分けてもらうべきだったと少年は肩を落とすと、また枯れたように地面にべったり張り付き、次の救世主を待つのだった。

走る

すでに息は切れていた。

喉からはひゅーひゅーという掠れた音が早いテンポで吐きだされ、今もなお、そのリズムは速さを増す一途を辿っている。

私は霞んだ視界に目をこらし、何度目かの角を曲がる。小石を踏んで転びそうになったが、なんとか体勢を立て直した。そのあとすぐ、水分で重く垂れ下がった髪が目に入った。止まるという選択肢は最早私にはなく、走りながら目を擦ることを余儀なくされた、その時だった。

キキ——ッ。

気付いたら私はゴツゴツと尖ったアスファルトの上に倒れていて、体中には筋が吊ったように鋭い痛みが、火の付いた導火線のように徐々に、そして着実に体内を支配していった。なんで。あたりを見渡すと目の前に自転車が転がっていた。そして今もなおカラカラとタイヤは忙しく回転を続けている。そばに倒れていた男の人が血相を変えて私に何かを叫んでいる。髪も服も濡れた不格好な男だった。

その内容は聞き取れなかった。それが大雨のせいで耳に届かなかったのか、興味のないことに耳を傾けている余裕がなかったからなのか分からない。けれども、気付いたときにはもう、私は走り出していたのだ。

顔に吹き付けてくる雨のせいで瞼はまともに開くことはできない。そのため私は勘と一ミリにも満たない僅かな隙間からみえた景色を直感的に判断して走り続けた。肘にピリッと痛みが走る。見てみると出血していた。それも結構な量の。それと同様に膝からも痛みを感じた。けれど、それは見ることはできなかった。

いつも通っている風景が三倍速で過ぎていく。一斉に大量の紙を引き千切るような雨音がいちいち耳に障った。あと少し。もうちょっと。そこでデジャブのような感覚が訪れた。

キキ——ッ。

不意にさっきの光景がフラッシュバックで蘇る。今度衝突したら間違いなく走れなくなるだろうな、と私は推測し、恐怖と後悔で背中が丸くなった。

「佳奈ちゃん？」

しかし私の体は吹き飛ぶこともなければ、なにかと接触することもなかった。そのかわりにぶつけられたのはその言葉。

「え？」

私は自分の名前を呼ばれたことに驚き、薄眼をあけて前を見た。男の人が自転車に乗っている。中山君だ。彼もまた目を丸くして私の事を見ていた。そして、溢れる雑音に埋もれないよう大きな声で彼は言った。

「どうしたの？ 傘もってないの？ って！ 怪我してんじゃん！ 大丈夫？」

私は一刻も早く走り出さなければならなかった。走るしかなかった。だから彼の問いに早口で応えた。

「バイトしてたら電話がかかってきて、お母さんが車に跳ねられて、それで、それで」

私はその後、近くにある病院の名前を口にした。それを真剣な顔で聞いてくれていた中山君は

、悩む仕草を見せず、自転車の向きをかえると、「乗れよ」というふうに関を動かし、荷台を手中で叩いた。

「え、いいの？」

「早く！」

私は慌てて自転車の荷台に飛びのった。

さっきよりも速い速度で景色が後ろに流れていく。私は彼の腰にしがみつきながらお母さんの事を思った。急いで病院に向かうように怒鳴ってくれた店長を思った。そして、中山君を思った。

病院には数分で着き、駐輪場付近に自転車を投げ捨てるノロマな自動ドアを急かした。癩に障る笑顔を振りまいていた受付の人に母の名前を怒鳴りつけた。その人はうろたえた様子でパソコンを操作し、何回か失敗したような顔でこっちを盗み見た後、部屋の番号を告げた。私は走った。

白で統一された病院内を駆け巡り、幾度となく職員からは走るなという勧告を受け、それを私たちは幾度となく無視した。

ようやく辿り着いた部屋の扉のわきには母の名前が書かれているプレートがかかってなかった。けれども私は躊躇することなく扉を横に滑らせ、駆けこんだ。

そこにいたのは姉と父、そして医師と見られる男の合計三人。姉と父はしゃがみこんで、ベッドのわきに頭を押し付け、震えていた。医者はその顔には表情がなく、ピンと伸ばした背中からは冷酷なロボットがごく自然と連想された。

私はベッドに横たわり、顔に白い布を乗せている人をじっとみた。

ケーキはどこにいった

ケーキがない。

昨日買って、冷蔵庫の中に入れておいたはずのケーキがない。

誰だ。誰が食べたんだ。誰が僕のケーキを食べたんだ。

「ダレガ、タベタンダ？」

「あっ、ケーキなら私が食べたよ？」

ソファーに寝転びテレビを見ていた彼女が、こちらを見ずに手だけをまっすぐ挙げて言った。

しばしの沈黙が僕らを包み、テレビの愉快でポップなサウンドだけが鼓膜を震わせる。

やがて、会話が途切れたことを不思議に思ったのか、彼女がチラリと僕の顔を見ると、ぎょっとした様子で急いで上体を起こし、「あっ、ご、ごめんね？ ホントにごめんね？」と、潔く謝りだした。

その彼女の怯え方から察するに、よほど僕の顔が怖く見えたのだろう。しかし、その顔は彼女を笑わせたかった為に作った表情であって、言わば変顔だ。それによって彼女を怖がらせてしまったことは予想外であった。

彼女は僕の顔色を窺うように、何度もごめんねと呪文のように唱えていた。彼女は強張った顔をしていて、終いには泣いてしまいそうな雰囲気さえも感じ取れた。

しまった。

僕は、依然としてビクビクと震えている彼女の恐怖心を緩和するべく「美味しかった？ なんで食べちゃったの？」と敢えて、いつもより優しい声で、微笑みながら尋ねる。すると、彼女はソファーの脇に添えてあった白く、四角いクッションを抱きしめながら「お腹、空いてて、冷蔵庫にケーキがあって、美味しそうで、美味しかった」と、子供のような稚拙さを感じる言葉を、上目遣いで申し訳なさそうに言った。「こっ、今度同じやつ買ってくるから！」と慌てて言う仕草も妙に幼く見える。

「いや、美味しかったならいいんだ。そんなに食べたかった訳じゃないし、別に怒ってもないから気にしないで」買わないでいいからね。と僕は彼女をなだめる。

実際にそれほど気にしていなかった。

確かに冷蔵庫の中にあったケーキが食べられていたことは残念だった。でも彼女が素直に反省し謝るのなら、それ以上咎めるつもりはないし、そもそも僕が彼女に一言食べないでねと言っていればこんなことにはならなかったわけで、僕の方にも責任は少なからずあるわけだ。

彼女は僕の言葉を聞いた後すぐに、何故か怒ったように立ち上がると、抱いていたクッションを床にたたきつけながら言った。

「いや、買ってくる。全部私が悪いんだもの。それにそんな簡単に許さないでよ。私はとても酷い事をしたわ。それ相応の罰を受ける覚悟はできているの。さあ、なんでも言って頂戴」

「……………」

僕は困った。非常に困った。

罰って何？ なんか与えなきゃいけないの？ ケーキ食べたただけだよ？

僕がウジウジとそんなくだらないことを考えていると痺れを切らした彼女は、

「早くしてよ！ 何をそんなに悩んでいるの？ 男ならスパッと言いなさいよ！」

と、怒った。

おかしい。どこをどう間違えたんだろう？ なんで僕がこんなにも責められているのだろう。しかしこんなこと考えている時間はない。今すぐにでも罰とやらを与えなければまた彼女に怒鳴られるだけだ。

だから僕は適当に思いついた事を口にした。

「じゃあ...、罰として、これから僕と一緒に新しいケーキを買いに行こう。いいね？」

彼女はキョトンとした様子をしていた。

「その罰を受ければ私の罪は報われるのね？」

「う、うん。そうだよ」

僕はガクガク頷いた。すると彼女は子供のように顔全体で笑顔を作り、

「それなら早く行きましょう」

と言って、彼女は素早く靴を履くと、僕の手を引き、あいているもう片方の手でドアノブを回した。

「私、チーズケーキが食べたいわ」

平日の昼下がり。買い物に出かけようと駐車場へとむかった千早は、その光景にすこしだけ驚いた。

淡いみどり色をしたキューブの車体には、ノラと思しき三毛猫が堂々と昼寝をしている。猫の種類に疎い彼女は、その猫に《黄土色と白と黒のマーブル柄》程度の印象しかもたず、それよりも、車体で爪とぎされてないか、のっかった拍子にどこかへこまされてないか、そんなことばかりが頭をめぐった。

彼女は、とりあえずそいつをその場からどかすことを第一に考えた。

寝ているとはいえ、相手は野生の生物。追い払おうとへたに刺激をあたえてしまえば、逆に襲われてしまうかもしれない。慎重にせめなければ。千早はじりじりと少しずつ車へと近づいていく。

十分な距離を保ちつつ、彼女は手をたたいた。これに驚いて逃げていってくれたらいいのだけれど。

パンッ！

パンッ！

パパンッ！

けれど組んだ前足に頭をのせながらふてぶてしく眠り、起きる気配が感じられない。よほど深く眠っているようだ。そのすがたを見て、わずかに余裕を感じた彼女はふたたび忍び足で車体へと近づいていく。

一步、二歩、三歩。

徐々に猫の毛の一本一本までもが鮮明になっていく。つづけて、四歩、五歩。

やっとも思いでドアの前についた彼女は、ちょうど目線の高さに鎮座するそいつを起こさぬよう慎重にシーンズのポケットから鍵をとり、穴にさしこみ、かるくまわす。ガチャ。ロックの外れる音がした。

その音は振動を含んで車体を伝い、ネコのからだをわずかにゆらす。

しっぽがひょろりと上をむき、千早のからだは凍りついた。

しばしの沈黙がおとずれ、千早のからだは鍵を抜いた直後の体勢でピタリと止まり、見ひらいた眼は猫の輪郭をなぞるように網膜に焼きつける。普段は意識していない呼吸のリズムさえもが気になりだしたとき、そいつがしっぽを上げたままの姿勢で静止していることに気付いた。彼女はそっと胸をなでおろす。夜中、家族にばれないよう冷蔵庫をあけるときのようにしてドアをひらくと、即座に車内へと乗りこみ、わざと強めにドアを閉める。

バタンッ！

瞬間、彼女の頭上ではゴトッという鈍い音がきこえ、三毛猫はこどもに踏まれぬよう必死に逃げまどう蟻のごとくその場から逃げ去っていった。その姿を千早は安堵とともに目で追い、フロントガラスにつけられたあしあとの置き土産に、ため息をひとつ、苦笑った。

はあ。

つまらない。

退屈だ。

降りたい。

でも降りれない。

俺はいまブランコに揺られていた。

足を曲げ伸ばししながら上手に体重移動続けていけば、いつまでも遊んでいられるこの魔法の遊具は二十歳の俺にはいささか幼稚すぎたようで、人の目を気にすると恥ずかしくてやってられないから今でも無心でこぎ続けている。

人目に関して言えばぶっちゃけどうでもいい。けどなにより問題なのはブランコのサイズが小さいことだ。

座る板の部分なんて窮屈でお尻がはまってしまっていて抜けそうにない。しかも、ある理由から降りることができないものだから、その圧迫感に屈して降りてしまうこともままならない。そしてその「ある理由」がこの面倒事を引き起こしている最大かつ根本的な原因であって、あらすじで説明すると、無邪気にブランコをこいでいた俺のもとに一匹の犬がやってきて、そいつがおもむろに靴を片方くわえて去っていき、その現場を目撃した俺の親友がそいつを追っかけていったつきり帰ってこない、という感動のエピソードがそこには詰まっている。幕はまだ閉じていない。

いざとなれば裸足で帰ることもできるが、それは親友の努力に対する裏切になってしまう。俺なんかのために頑張ってくれているのだからせめて最後は笑顔で迎えてやりたい。でも、そろそろ俺のお尻が限界だ。はやく帰ってきてくれーと願う一方、きっと見つかるまで戻ってこないだろうな、とも思っていた。が、それではダメなのだ。なにがダメかというと、見つかるまで戻ってこないというのがダメなのだ。彼の性格から察するに見つかるまで帰ってこないというのが一番考えられるな解答なのだろうが、それではいけないのだ。それだと俺が帰れない。要するに、見つかるわけがない。あいつが見つけれられるわけがないのだ。なぜなら俺の十メートルほど先には親友が必死に探しているはずの靴が転がっているからで、それは犬が途中で落としていったものだった。

犬が靴を落とすその瞬間を、俺は見ていた。もちろん俺は必死になって親友に向けて大声を上げた。でもそれに気付かなかった親友はその犬を追って行ってしまったのだ。

俺は歩いて十歩はかからないだろう距離に転がった自分の靴をブランコに揺られながら三時間弱ずっと見つめている。

歩いて取りに行こうかなどという考えは、何度も頭でまとまりつつあった。

けれど、しつこいようだけど、俺は親友の頑張りを無駄にしたいくはないのである。

彼は俺のために犬を追っかけ、普通ならとっくに諦めているくらいの時間を超えてもまだ探している（と信じている）のだ。俺はその雄志を讃えたい。

だから俺は待っている。

ブランコに揺られて、俺は待っている。

悲しさ

小学生の頃だったと思う。僕にはとても、とても仲がよかった友達がいた。その子は生まれつき体が弱くて、学校にもあまり来ていなかった。

僕は一週間に一度、学校で配られたプリントをその子の家に持って行ってあげた。プリントだけでなく、ノートも二冊書いて、その子に一つを渡していた。そして勉強も教えるのも僕の役目。とはいっても、バカな僕が教えるのだから当然言っていることは支離滅裂で、何一つ伝わってなかったと思うのだが、それでもその子は僕の授業を楽しそうに聞いてくれていた。

この年の移動教室は、近くの野原だった。空気が澄んでいて、見晴らしのいい野原。そこで花をスケッチすることになった。

クラスメートたちは、一人ひとり、自分のスケッチブックを手にとり無邪気に好きな所へ走っていった。そんな中、ポツンと車イスに座っているその子に、僕はいつものように話しかけた。体の弱いその子が、このような行事に参加することは初めての事で、僕はすごく嬉しかったんだと思う。

「真ちゃん、その麦藁帽子似合ってるよ」

いつもより高いトーンで声を出した。

でも返事はない。いつものことだ。

真ちゃんは自分に興味のある事しか話そうとはしない。だから、彼の事を知らない人は《無愛想な奴》と思って避けていく事もしばしば。僕も初めはそうだった。でも、話してみると真ちゃんは頭がよくて、僕の知らないことをたくさん知っていた。その一つひとつがすごく面白くて、僕はすぐに彼のことを好きになったんだ。

「雑草なんか見てて、たのしい？」

僕は沈黙に弱い。話していないと死んじゃうのだ。だから彼が力の限り生い茂るタワシのような雑草を見ている様子を見て話しかけた。

ピクン、と僅かに反応を示した真ちゃんはゆっくりこっちを見た。まゆ毛は少しつり上っていて、なんか怒っているようにも見えた。でも、その後すぐにしぼんでいく風船のように元気がなくなった顔になって、口をひらいた。

「《雑草》っていう草は無いよ」

「え？」

「一見特徴のないように見えるこの草や、花にも一つひとつ全部に名前があるんだ。名前があるのに、それを《雑草》なんて言葉でまとめちゃダメだよ」

「へー」

「それに植物だって生きているんだ。生きている以上、いつ死ぬかなんて分からない。存在しなかったことにされるかもしれない。だから、ボクたちがこうして絵にして描いてあげることによって、植物たちの存在証明をしてあげるんだ」

「難しくてよくわからないよ」

「……ごめん」

それきり、真ちゃんは黙りこんでしまった。

僕は仕方ないので、車イスの脇に腰かけて、目の前に咲いている小さな花を五分ほどでスケッチした。十円玉くらいの大きさの黄色い花。

これにも名前はあるのだろうか。

「ねえ、真ちゃん。この花の名前わかる？」

「……」

おかしいな、と思った。

さっきは食いついた話題のハズなのに。

僕は、車イスに座る彼を見上げた。目深にかぶっている麦藁帽子のせいで、彼の表情は見えない。空には絵具みたいに濃い青空と雄大な積乱雲がたくましい壁のように果てしなく伸びていた。夏、直感的にそう思った。

「真ちゃん？」

声が届いてないのかと思って、車イスをぐらぐらと揺らした。が、彼の持っていたスケッチブックと色鉛筆がバラバラと落ちてきた。

「わっ、わっ」

僕は慌てて、それらを急いで拾い集めると、真ちゃんに渡そうと立ち上がった。

「真ちゃん、はい」

「……」

返事はない。

それどころか、彼の手は車イスのわきにガラッと力なく垂れ下がっていて、それを受取ろうとする気配もないように感じ取れた。

その時、僕は何か悪い予感がした。

「真ちゃん？」

と彼の肩に揺さぶる。

力が抜けているようで、重かった。

それでいて、何かが欠けていて軽くなっているような様子でもあった。

揺らしているうちに、首が、ガクン、と傾いた。

麦藁帽子が、ゆっくり、落ちた。

彼は目を閉じていた。

まるで眠っているかのようだった。

眠っていてほしかった。

それなら、いつか起きるんだから。

けれど、彼が起きることはなかった。

僕は氷のように固まった。寒くもないのに体がガタガタ震えた。汗が額を伝ったが、ミミズが這っているかのようにひんやり冷たかった。

異変に気付いた先生たちは、彼のそばで動かない僕を邪魔そうに睨みつけた。そりゃそうだ。なにもできない無能な僕がどかないで立っているということは、狭い部屋のど真ん中に建っている必要以上に太い柱のように無益な存在なのだ。それでも僕は彼の近くにいたかった。やがて先

生たちが真ちゃんの周りを囲い、彼の姿が見えなくなった。僕は疎外感から俯くと足元に真ちゃんのスケッチブックが落ちているのを見つけ、手にとった。

僕は今年、晴れて社会人になった。それでも尚、真ちゃんの事をたまに思い出す。

——雑草なんて名前の草は無い。

彼はそういうふうには言っていた。

僕はときどき、こう思う。

あの日、真ちゃんは死ぬことを分かってたのかもしれない、と。そして、自分の事が忘れられるのが怖かったのかもしれないと。

彼自身にも名前があって、確かに生きていたことを残したかったのかもしれない。

そんな彼のことは僕の心の中でずっと、永遠に残るであろう。何があっても彼が生きていた事を忘れてはしないだろう。

僕は真ちゃんが最後に書いた絵を大事に引き出しから取り出した。

キャンバスいっぱい描かれていたのは、名前のある無数の草や花であった。

真ちゃんはちゃんとその存在証明を果たしたのだ。

じゃあ僕にできることはなんだ。

その考えの辿り着く先は、やはりこの絵を持ち続けることなのだと思う。僕がこの絵をいつまでも所持することが彼が確かに生きていたという証明になるのだ。だから、今でも大事に持ち続けている。

僕はまた真ちゃんを引き出しにしまった。

告白

世の中はびっくりするくらいにびっくりすることがない。事実は小説よりも奇なり？ はっ。笑っちゃうよ。そりゃあ小説の世界からみたら私の住む世界なんてびっくりするくらいに平凡で、普通で、普遍ですよ。でも、だからってそんな惨めなことを敢えて格言みたいにして残すことないじゃん。考えた人誰？ 馬鹿みたい。

とかどうでもいいことに悪態ばかりついてる私でもこの日、びっくりする出来事に遭遇した。いつもはちょっと驚いたくらいじゃ態度に表わさないで、斜に構えてる私カッコいいとかそんなこと思ってる私でもこれにはびっくりした。

それは財布の中にいた。

《紫式部がない》

誕生日に、お母さんが買ってくれたターコイズブルーの牛革の長財布。その中から声がきこえた。

《なんで》

財布をひらくと目があった。紙幣の中の野口英世は泣いていた。

《昨日まではいたのに》

悲痛で切実な嘆き。彼の流す涙で紙幣はふやけてしまっていた。

《昨日、告白したばかりだったのに》

なんで私の目を見ていうの。それより、紫式部。それはきっと二千円札のことだろうけど。今にしては珍しい二千円札。私は数日前に入手して以来物珍しさから長い間財布に入れ続けていたけれど遣い勝手が悪いことを理由に昨日遣ってしまったのだ。

でも、私、そんなに悪いことした？ 自問する。してないよと自答。だよね。そうだよね。なのに、それなのに、なんでこんなにも罪悪感を感じなきゃいけないの？

「遣った店は覚えてる」

口をひらくと野口は折りたたんでいた顔をぱりぱりあけてこっちに紙を向けた。

《また会える？》

「たぶん、まだそこに残ってればだけど」

とりあえず行くよ。言って私は歩きだす。

野口はくしゃくしゃにふやけた体で涙を拭きとると、満面の笑みを私にうかべたのだった。

何日か前、わたしは歩いているときに突然意識を失い、目が覚めたときにはもうここにいた。

この場所はまっ黒で、いろいろな排泄物のだす異臭がつねに鼻をついてくる。たぶん四角い部屋。一辺が歩幅でだいたい七歩の広さで天井の高さはわからない。ジャンプしてみても届かなかった。ほかにわかったことがあって、ここにはわたし以外にも二人の人がいるみたいだった。そのうちのひとりはずっと寝ころんでいて、たまにわたしが蹴ってしまうと「くふふ……」と嗤う。もう一人は壁にもたれていて、わたしがここに来たときから移動していないような気がする。もしかしたらもう死んでいるのかもしれない。

うらやましいなあ、わたしは思った。

ここはまっ暗で、臭くて、誰かほかに人がいて、狭い場所。

正直、死にたくなる。

でも、ここは簡単に死ねる所じゃない。というのも、たまに誰かもうひとりの人物がここに入ってきて、強引にわたしの口に食べ物を詰めこみ、甘い飲み物も一緒に飲ませて、出ていく。出口はどこなんだろう。天井かもしれない。届かないや。まあとにかく餓死はさせてくれないみたい。

次に壁に頭を打って死ねばいいと考えたけど、ここは四方の壁は低反発素材か何かでできているから衝撃のほとんどが吸収されてしまう。きっともっと探せばいろんな死に方が思いつくのもかもしれないけど、頭が働かない。

外に出たいなあと考えた。

わたしの暗闇に慣れたこの目で地上に出たらどうなるんだろう。まぶしさにびっくりして死んだりしないだろうか。ああ、それでもいいかな。地上で死ねるなら。

地上に出るなにかいい方法はないかと黙考する。

ひとつしか思いつかなかった。

——食事の時に入ってくる人間を殺してみよう。

出口はわからないから、ここから出ていく瞬間に襲いかかろう。

道はわからないけど、ここから出られればきっと明るい場所に出られる。

わたしは地上で死ぬことを夢見て、食事のときをひたすら待つことにした。